お六姫伝説

烏山城主が、新昌公だったころの話。

藩主の妹、お六姫は書物を好み、とても美しい姫として評判が高かったと。

お六姫は、十七歳のとき、城内家老の息子、左近に嫁ぎ、間もなく長男権之助が生まれた。

その頃、舅（家老）は、正妻に先立たれたので、下女として使っていた、渡し場の娘を後妻にした。この後妻は、間もなくお六姫の夫の左近と良い仲になった。それを隠すため、舅とお六姫が、不義密通していると噂を流し、濡れ衣を着せ、毎日毎晩、怒鳴り、殴るけるのいじめを繰り返していたと。嫁姑の仲とは言え、藩主の妹を渡し場の娘がいじめるなど、考えられないことだった。

姫は、不義の噂が立つだけでも恥とけなげにも、舅と夫の横暴に耐えた。

全く身に覚えが無いから、無実は簡単に晴れると思って、また兄にも心配かけてはいけないとの気持ちもあって、我慢に我慢をしていたから、それを良い事にいじめはひどくなるばかりだったと。

ある冬の寒い夜、庭の大きな木の根元に裸で縛りつけ、割れ竹で殴り、気を失うと水をかけ、またなぐる。

「死んじまえ、恥知らず、くたばれ」

と殴り続けた。言葉に言い表せぬ程に責め、凍りついた地面に夜中まで、放って置かれたから、打たれた身体がずきずき痛み、冷えきった寒さは身体中を締めつくす。その苦痛はたとえようもなかった。

やっと許され自分の部屋に戻った姫は、傷む身体を横たえ目をつぶっていた。あまりのむごさに生きる気力を無くし、筆を執った。濡れ衣を着せられたまま死ぬ無念さと、息子の将来を託した遺書を残し、安らかに眠っているわが子の顔を見、あふれる涙をおさえた。そして、ほほをなでながら

「弱い母をゆるしておくれ」

と、わび自害した。十九歳だった。

妹が、姑と夫にいびられての自害と知った、兄親昌公初め、城中の驚きと悲しみは大

変なものだった。

「なにゆえに生きていて、我に話してくれなかった」

と無念さが、家老一家への怒りとなり、その後、家老と後妻を追放、夫左近を打ち首の刑とした。

お六姫の亡き骸は、天性寺の墓地に葬られ、姫の遺品と一緒に田畑も、供養料として寺に納められたと。

おしまい